今度は護ると決めたから

アクベンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今度は護ると決めたから

【Ｎコード】
Ｎ８１８７Ｌ

【作者名】
アクベンス

【あらすじ】
朝、神楽坂明日菜が目を覚ますとそこは５年前に二度と帰らないと誓った筈の麻帆良だった。
自分がネギが麻帆良に来る日に戻ってきた事を知った明日菜は、未来に起こるネギの死を阻止すべく奮闘するのだった。
もし、ネギが魔法世界到着時の襲撃で木乃香の回復が間に合わずに死んでしまった場合の、その後の明日菜のＩＦ逆行物です。

第1話　始まりの朝（前書き）

何分小説を書くのになれていないので拙いとは思いますが、一人でも多くの方に読んで貰えるよう頑張りますので、どうかよろしくお願いします。

第1話　始まりの朝

小鳥の囀りとふかふかとした地面（？）の感触を感じ、私の意識が覚醒する。
……なんだろう、妙に心地よくて置きたくなくなる。
それでも目を開けると、どこか懐かしい風景……というか天井があった。

「え？麻帆……良？」

そう、昔麻帆良にいた頃に住んでいた学生寮の天井に似ているのだ。
でも、私はもう麻帆良には帰らないと決めた筈なのに何故今更こんな所で寝てるのだろう？
疑問に思いながらも起き上がって周りを見渡すと、更におかしな事に気付いた。

「ここ……私と木乃香の部屋……？」

恐らく間違いない。
二段ベッドの上で、少し下を見れば自分達が使っていた机やらなんやらが見える。
しかも今気付いたのだが、身体がなんとなく軽く、格好も昔着てたパジャマ。
つまりこれは……

「私……中学生の頃に戻ってる？」

そんなバカな事があるのだろうか？
でも、超さんの事例を考えるとあまり否定出来ない。

流石に年齢まで戻ってるのはおかしいとは思うが、魔法なんていう物がある以上悩むのはあまり意味をなさないとも思う。
それよりも何故こんな状況に陥っているのかを考えてみるべきだろう。
確か昨日はネギのお爺さんたるメルディアナ魔法学校の校長に頼まれた仕事の為に、一人寂しく森の真ん中で野宿をしたはず。
依頼内容は確か魔法具窃盗団の逮捕及び過去に盗まれた盗品の回収。
簡単な割に報酬が良かったから快諾したのだが、昨夜何かあっただろうか？
いや、特に変わった事は起こらなかった。
つまり、少なくとも自分の行動が原因ではないはずだ。
となると、例えば寝ている間に何者かに何かされた……というのが妥当なところになる。
しかし、相手が一流でない限り気付かない訳がないだろうが、むしろこんな真似が出来るとしたらそれこそ一流だろう。
確証は持てないが、可能性はある。

「う～ん、夢……とは思えないし、とりあえず状況を可能な限り把握しとかないと対応のしようがないわね」

そう、例えば今日がいつかによっては今後の方針も決めないといけない。
私は傍らにあった携帯電話を取り出すと、カレンダーで確認する。

「え～と、あれ？この日って……」

この日付は確かネギが初めて学校に来た日だったはず。
はっきりとはしないが、当時学園長に耳に蛸が出来そうなほどに日にちを言われたので、なんとなくこの日だったと記憶している。
つまり、私の一番大切だった……あのネギとまた逢える。

ドクンと心臓が跳ねる。
嬉しさと悲しさが入り乱れるような感覚、けど……嬉しい。
大体5年ぶりの再会になる訳だから、実際会ったら果たして感情を抑えられるか……不安だ。
けど、ただ一つはっきりしてる事がある。
……今度は絶対に死なせたりはしない。

第1話　始まりの朝（後書き）

少し短かったかもですが、いかがでしたでしょうか。
感想等お待ちしております。

さて、次回はネギと再会します。

第2話　再会（前書き）

今回は少しは長く出来たと思います。
内容は題名通り明日菜とネギの再会から、学園長との件を経て廊下までを書きました。
ちなみにこの時点から既に少し原作と変わってきてますので、その違いも楽しんでもらえたらと思います。
……ほんと面白ければいいのですが。
それではどうぞ。

第2話　再会

木乃香も起きて朝の準備やらを済ませた私達は、新任教師を迎えに行く為に早めに寮を出た。
ここまで特に問題はなかったが、木乃香が少し困惑していたのが気になった。
……何か私の顔についてるのだろうか？
そう思って洗面台の鏡を見てもおかしな点は見つからなかったので、気にしない事にした。
木乃香との付き合いもこの時点で五年、昨日までいた世界も入れると役十年と相当長い。
なので、多分そのうち聞いてくると踏んでいる。
そうして学校へ向けて走っていると、案の定木乃香が話を切り出してきた。

「なぁ、アスナ～」
「な～に？木乃香」

私が聞き返すとやはり何か困ったような顔をしている。

「今日のアスナ、なんや変な感じせえへん？こう、妙に大人っぽいと言うか……」
「はい？」

……ああ、そういうことか。
つまり外見はともかく、中身は二十歳だから勘の鋭い木乃香にはなんとなく気付かれてしまうんだろう。
そうなるとどう誤魔化すかということになるが、要はこの頃の私ら

しいことを言えばいい。

「そうね～……多分新任教師って言うのがどんな人か気になって緊張してるんだと思う。格好いいオジサマとかならいいな、とか」

「あはは、アスナはほんま高畑先生みたいな渋い人が好きなんやな～」

私の言葉に、木乃香は警戒を和らげたのを感じ取る。

この頃の私なら、これで十分誤魔化せる筈だ。

……けど、もう一手打っとくか。

「ねえ、木乃香。その新任教師について何か占える？」

「へ？……う～ん、本人について殆ど判らんから難しいな～」

「そっか。はぁ～、早くどんなオジサマか会ってみたい！」

「あはは、まだオジサマと決まった訳やないやろ～？」

これで木乃香の頭から私への疑念はひとまず消えたと思う。

とはいえ、今後は気をつけないといずれ支障が出るかもしれない。

……それにしても、なんて平和的な会話なんだろうか。

私がいた未来の木乃香は、刹那さんを引き連れて世界を転々としてたが少し前に偶然会った時は随分やつれていた。

刹那さんによれば、ネギの故郷の石化を治す手段を探しているうちに色々あったらしい。

私も若干やせ細ってはいたが、あそこまでくると一時期の私並に異常だった。

……だからだろうか、こうやって健康で笑いながら学校に行けるのは嬉しくて仕方ない。

今もこうやってあいつを迎えに……って、あれ？

「そういえばどこで待ち合わせだっけ？」

「え～と、確か玄関前の辺りやったと思うんやけど……」

そう……だっただろうか？
あまり覚えている訳ではないが、少なくともこの玄関前では会わなかった気がする。
私は月日の経過による磨耗によって曖昧になった記憶をなんとか掘り返そうとしていると、突然校舎とは反対方向から悲鳴が聞こえてきた。

「なんやろ？子供が凄いスピードでこっち向かってくるえ？」「ほんとね……」

こっちに結構なスピードで向かってくる赤い髪の少年。
まあ、誰かなんて言うまでもない紛うことなきそのその姿に、私の心臓が跳ねる。

「す、すみません！お迎えの方ですか？」
「へ？迎えって……？」

私達の目の前で急ブレーキをかけたそいつは、私達に向かってそんなことを言ってきた。
それに反応した木乃香はその子供の言葉から答えを導き出したのか、驚いて口をポカンと開けている。
それを知ってか知らずかそいつはとどめの言葉を放つ。

「あ……と、ごめんなさい。今日からここの英語の教師になりますネギ・スプリングフィールドって言います。よろしくお願いします！」
「「え、えぇ～！？」」

驚く私と木乃香。
……いや、私のは演技であるが、しばらくこれを続けた方が怪しまれないだろう。
なので、それっぽく反応する。

「こ、子供が先生って……」
「はぁ～確かにビックリやな。けどネギ君言うんや、めっちゃ可愛ええな～。あ、ウチはおじ……学園長の孫の近衛木乃香言います。よろしくな～」

独特のお淑やかさがあるとはいえ、木乃香も枠に外れず今時の女子中学生なのだ。
ネギのような可愛い子供を見れば当然の反応だろう。
……何故かイラッときたのは内緒だが。

「は、はい。このえこのかさん、ですね。よろしくお願いします。えっと……」
「同じく神楽坂明日菜よ。明日菜って呼べばいいから。まあ、よろしく」

とりあえず私も自己紹介。
木乃香と違って淡泊な感じだが、騒ぐと時間が無駄なので簡潔に済ませといた。

「はい、アスナさんですね。よろしくお願いします！」

……ヤバい、なんか嬉しさがこれでもかってくらいこみ上げてきて油断すると抱きついてしまいそうだ。
この頃のネギは逞しさよりもあどけなさがまだ強く出てるから普通に可愛いのだ。

……ってこれだとあやかみたいじゃない。
と、1人でボケとツッコミをしていると木乃香が私の方を凝視していた。
「……なんか明日菜、あまり残念そうやないな～。てっきりオジサマやのうて理不尽に怒り出すもんやと思ったんやけど」
何やら酷い云われようではあるが、確かに不自然ではある。
さて、どう切り抜けたものか？
「いや、別に……」
「お～い！」
ひとまずまた誤魔化しに入ろうとした私に、文字通り救いの声が響いた。
「あ、久しぶりタカミチ～！」
ネギの向く先……校舎の窓からこっちに話しかけてきたのはやはり高畑先生だった。
「高畑先生、おはようございます！」
「おはようございまーす」
「お、明日菜君や木乃香君もいたか。二人ともおはよう。っと、今そっちに行くから待っててくれ～」
そう言ってしばらくすると高畑先生が降りてきた。
「おはよう、ネギ先生。麻帆良はどうです？良い所でしょう」
「うん、広くて綺麗だし凄いね！」

そう言って無邪気に笑うネギ。
それを見て私は一瞬見惚れてしまったが、すぐに1人誤魔化すように高畑先生に質問をする。

「あの、高畑先生と知り合いなんですか？」
「ん？ああ、昔ちょっとね。……さて、三人は学園長先生の所へ向かってくれ。僕は少し用があるから」

そう言われて私達は高畑先生と別れ、学園長室に向かった。

～～～～～～～

学園長室に到着すると、当然ながら学園長が待っていた。
そして廊下の隅にしずな先生も待機しているようだ。

「おお～よく来たのう、ネギ君。このかやアスナ君もご苦労じゃった」
「まあ、はい」

学園長の言葉に私は適当に返事をした。
そんな私の態度を学園長は気にする様子もなくネギの方を向く。

「さて、あやつから連絡は受け取るが、一応話を聞かせてもらおうかの」
「あ、はい」

そうしてここに来る経緯を話し出したが、当然ながら魔法については伏せられた。

「なるほどのぅ、修行で日本の教師とはなかなか難儀なものを受ける羽目になったものじゃ」

そういえばこの修行というのはどういう風に決められているのだろうか？

偶然……とはとても思えないので、やはり学園長達が関与していると見てまず間違いないはずだ。

……そうなると途端にこの会話がきな臭くなってくる。

と、そんなことを考える私を余所に話はトントン進んでいく。

「あの、ボク……一生懸命頑張りますので、どうかよろしくお願いします！」

「うむ、承った。さて、早速今日からやってもらうとして、指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

学園長の言葉で先ほどから扉の前で待機していたしずな先生が部屋に入ってくる。

……と、同時にそれは起こった。

ネギとしずな先生がぶつかったのだ。

「むぅっ」

「あら、ごめんなさい」

謝るしずな先生。

しかし……明らかに態とだろう、今のは。

「（ぼそっ）羨ましいのぅ。……分からないことがあったら彼女に聞くといい」

……今、なんか無性に殴りたくなったが我慢した。
それよりもネギの方が気になる。

「よろしくね」
「あ、はい」

顔は見えないけど絶対デレデレしてるわね。
ここは注意しないと……しずな先生に。

「先生。いくら相手が子供だからと言っても、色仕掛けはどうかと思います」

私の注意にしずな先生は少し怯んだような表情をした後、ネギから離れた。
ほっとした私だったが、ふと周りを確認すれば木乃香も学園長もきょとんとしていた。
……またやってしまったか、と私が反省しているうちに、学園長が気を取り直して話を進める。

「え～、あ～……そうじゃ。済まんがしばらくこのかやアスナ君の部屋にネギ君を泊めてもらえんかの」
「え？」

惚けていた木乃香が再び機能停止になる。
確かにいきなり言われるには少しばかり刺激が強い気もするが、それに反応してこそ木乃香……と思うのは買いかぶりだろうか？
とりあえず固まった木乃香の代わりに私が話して、木乃香が復活する時間を稼ぐことにする。

「それは……もう決定事項なんですか？」

「……まあ、そうじゃな。何分急じゃったから準備が出来なくての」
……多分嘘だ。
ネギは当時ここに来る半年くらい前に卒業していたと言っていたし、実際は部屋の一つや二つ空いてるはずだ。
……しかしまあ、断る気なんて更々ないが。
「……判りました。学園長の頼みなら私は断る理由がないんで」
「あ、え～と……ウチも問題ないえ」
木乃香が私をこれでもかというくらい不思議そうな目で見てる。
……しまった。
木乃香の為に時間を稼ぐ心算が、逆に手短にしてしまった挙げ句不信感まで募らせてしまった。
「う、うむ。それでは時間も押しとるし、教室へ向かいなさい」
学園長も少し訝しむ様子を見せながら私達に教室へ向かうよう言ってくる。
室内にある時計を見ると、確かにもうすぐ始業ベルが鳴る時間なので、私達は素直に退室した。
「……」
残された学園長たる近衛近右衛門は両目を瞑り、しばらくそのまま動くことはなかった。
～～～～～～～
廊下に出ると、隣を歩いていたネギが何か話したそうにしている。

「どうしたの？」
「あ、いえ……わざわざ迎えや案内をしてもらったのに寝泊まりまで提供してもらって申し訳ないなと……」
……そういえばこういう性格だったな、ネギって。
本人が気付いているかはともかく自分より周りにばかり目が往ってしまうのは、やはり偉大な魔法使いの息子故といったところか。
「いいのよ、日本じゃ困った時はお互い様って言うから。それに、あんたみたいな子供を野宿させたりするなんて寝付けが悪くなるし」
本音を言えばあやかとかの部屋に流れないようにしたいとか、また一緒に寝たいだけだったりするが勿論言わない。
「うぅ……やっぱり聞いていた通り日本人は優しいですね。ボク、感動のあまり泣きそうです」
「大袈裟ねぇ」
そうして私とネギが楽しく話している中、少し後ろを歩いていた木乃香としずな先生はというと。
「今日のアスナ、なんや変な感じやわ～。先生はどう思います？」
「私は彼女についてあまり詳しくないけれど、文句も言わずあああやって優しく接するのはいい事だと思うわよ？」
「それはそうですけど……なんや遠く離れてた姉弟が再会したみたいで」
「ふふ、あれを見てると案外間違ってないかもしれないわね」
二人の視線の先にいる明日菜とネギは、確かに本当の姉弟の様に仲睦まじい雰囲気だった。

第2話　再会（後書き）

今回は1話より長い分もしかしたら誤字・脱字があるかもしれませんので、もしそのような点がありましたらご報告頂けると幸いです。
さて、次回は教室での騒動を書きたいと思います。
序盤はいかに割と明るい雰囲気を保ちたいのですが、いきなり明日菜には軽い修羅場を用意してるのでチートになりすぎないようにしながら書いていけたらと思います。
それではまた次回お会いしましょう。

第3話　自己紹介（前書き）

今回は少し短くなりました。
読者様の方々に色々と注意されましたのでそれを矯正しつつ今後もより一層気をつけて参りますのでどうかよろしくお願いします。
あと書き忘れてましたが、明日菜以外のキャラは基本原作通りです。
しかし明日菜は原作より年を重ねている分、若干性格や一部のキャラへの呼称や対応が少し変わっています。
例）いいんちょ→あやか、委員長
なので、そこら辺の注意に関してはあまり反映出来ないと思うのであしからず。
勿論あまりにおかしいと思う点は別ですが。
それではどうぞ。

第3話　自己紹介

ネギとしずな先生と別れた私達は先に教室へ着くと、もう全員登校しており殆どが自分の席で待機していた。
私は久しぶりに見る懐かしい面々に一瞬涙を流しそうになったが、なんとか堪えて元気良く挨拶する。

「おっはよー！」
「おはよ～」
「あ、アスナにこのかおはよー。始業ベルギリギリだけど寝坊？」

まず始めに声をかけてきたのは裕奈だった。
前の世界で彼女とは少し複雑なことになっていたので、少し臆してしまう。

「あ……ち、違うわよ。ほら、今日新任教師来るからそのお迎え」

私がなんとかそう返すと、近くにいたハルナも話に参加してくる。

「あ～、このかのお爺ちゃんって学園長だもんね。……で？その新任教師ってどんな人だったのよ？イケメン？それとも絶世の美女？」

やはり新任教師が気になるのか、ハルナの目はいつもの好奇心で埋め尽くされている。
……もし万が一『こっち側』に関わることがあったら、厳重に注意しなくては。
しかし、少なくとも今は気にすることはないだろうし、返事をする方が先決だ。

「それは来てからのお楽しみよ。さ、もう来るはずだから席に着きましょ」

私がそう言って席に着くと、裕奈やハルナも渋々自分の席に戻っていき木乃香も私の隣の席に腰を下ろした。
そうしてタイミングを計ったようにノックがし、教室の扉が開かれた。

「し、失礼しま……」

話題の人物……つまりネギが恐る恐る教室へ入ろうとすると、例によって黒板消しが降ってくる。
そしてネギに当たると思った瞬間、一瞬それが頭上ギリギリで止まる。……が、そうと皆が気付く前に黒板消しはネギを直撃したのだった。

「ゲホゲホ……いやー、あはは……なるほど、ゲホ。引っかかっちゃったなぁ……ゴホ」

そう言って歩き出すネギに更なる罠が仕掛けられていた。

「へぶっ!?あぼっ……あああああっぎゃふん!?」

……ネギの悲鳴だけでは判りにくいので状況を簡単に説明すると、まず足を糸で引っかけたネギが転ぶとバケツが頭に落下し、更にそのバケツを被ったまま何故か前転を繰り返し教壇の机にぶつかったのである。
私はため息を吐くが、辺りは笑い声でかき消されていた。

「はい、皆さん静かにしてね。さ、ネギ先生お願いします」
「あ、は……ハイ！」

しずな先生の一言で静まりかえる教室。
そもそも数名を除いて目の前に立っている子供が今先生と呼ばれた事に驚いているのが正しいみたいだが。

「あ、あの……ボク……ボク……今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。３学期の間だけですけど、よろしくお願いします」

ネギが自己紹介を終えるがやはりまだ静かな教室。
そんな雰囲気にネギが少し不安そうな顔をしているが、その不安は杞憂に終わる。
なぜなら……

『きゃぁぁぁ！可愛いぃぃぃ！』

このクラスは特別騒がしい。
子供が先生をすることへの疑問よりも、むしろ可愛い子供が自分達の物になることへの歓喜の方が圧倒的に上回っているのだ。
そして、そんな彼女達による愛でながらの質問責めが始まった。

「ねぇねぇ、何歳なの！？」
「え、えっと……１０歳で……」
「どこから来たの？何人？」
「ウェ……ウェールズの山奥で……」
「ウェールズってどこ？」
「今ドコに住んでるの！？」
「いや、それは……」

『あの～私が視えますか～？』

……今、最後におかしな質問が混ざっていた気がするが気の所為だろう。

そこから目を逸らすように周りを見てみると、千雨ちゃんがしずな先生と話してたりエヴァちゃんが不敵に笑っている。

他にも何名か自分の席で待機していたり、近くにいる人に話しかけているのもいるが、とりあえず目の前の騒ぎを止めることを優先しよう。

そう決めた私は人溜まりをかき分け、ネギの所へ強行突破する。

そしてネギを発見すると、そこには息苦しさからなのか姉と慕う人物と年の近い人達に囲まれたからなのか、その顔は赤い。

……どちらにしてもネギがマセてるのに変わりない。

苛立つ気持ちを抑えて止めに入る。

「ほら、相手は子供でも先生なんだから少し抑えなさい！」

私の叱咤にネギを取り囲んでいたハルナや朝倉達が怯んだように仰け反る。

……そこまで強く言った訳でもなかったのに少し反応が大きすぎやしないだろうか？

「あ、あのアスナが……」

「はい？」

「あのアスナが至極まともな事を言ってる……」

『うんうん』

「なっ！？どういう意味よ、ソレ！」

朝倉の言葉に皆が頷くのを見て、流石の私も激昂する。

何せこれは暗に私が馬鹿だと言っているのだから当然だ。

なので、文句を言おうとした私だったが、横から邪魔が入る。

「つまり、普段がそれだけお馬鹿さんと思われてるのですわ。アスナさんは」

そう言って高々と笑い声をあげるのは私の幼馴染みにしてこのクラスの学級委員長たる雪広あやかだ。

そのあやかの辛口具合からすると、大方自分の役割を取られたとか思ったに違いない。

……こういう時の彼女は相手にするだけ面倒なだけだ。

なので、さっさと終わらせることにする。

「あっそ。今この場でその問答の必要性は感じられないんだけど、あや……委員長として今すべきは私も含めた全員を席に着かせる事じゃないの？」

私の切り返しに、あやかは何か恐ろしいものでも見たかの様に顔をひきつらせて身体を震わせている。

「あ、貴女本当にアスナさんですの……？」

この頃の私のあり方を考えればある意味尤もな質問ではあるが、今の私にとってあやかにだけはそれを聞かれたくなかった。

……だって、私を本当に理解してくれたのはあやかだけだったから。

「あんたが……そんな言い方しないでよ。……ほら、いいから早く席に着いてよ。先生が授業始められないでしょ」

つい思ったことを口にしてしまったが、なんとか皆に席に戻るよう言って自分の席へ戻る。

席に着く直前ふとあやかを見ると、そこには驚愕と困惑の入り混じったような表情を浮かべていた。
……その時の私にはその内心を見抜くことは出来なかったが、私はそれを後に後悔することになる。

「はい、それじゃあ皆席に着いて。授業を始めましょう」

私の言葉に反応しきれていないクラスメート達を、事の成り行きを傍観していたしずな先生の鶴の一声によってようやく各々が席に着いた。
そうして、どこかぎこちないながらも授業開始となったのだった。

第3話　自己紹介（後書き）

今回は少し短かったのであまり展開も進みませんでした。
さて、次回は歓迎会を中心に書く予定です。

……実はこの3話までは先に書いていたので修正して投稿という形だったのですが、今後は生活もあるのでゆっくりかつ不定期になるかもです。
なるべくそうならないよう務めますが、出来れば気長にお待ち頂ければと思います。

第４話　歓迎会……そして（前書き）

遅くなってすみませんでした。
第４話投稿です。

今回は、原作では描かれてない買い出しに行くまでの話から、原作通り歓迎会後の帰り道での会話までをかいています。
ただ、のどかファンには石なり投げられそうです。
てことで先に謝ります、ごめんなさい。
まあ、展開読めた方もいるかとは思いますが、一応本作品はアスナ×ネギを主体としていますので、ご理解頂きたく思います。
しかし、皆さんの思いが作者に伝われば、少しは出番なりが予定より増える……かもしれません。
他キャラも同様ですので、出番を増やして欲しいのがいれば書いてもらえるとやる気にも繋がるので勝手ながらお願いします。
（ただし、原作でまだ深く持ち上がってないキャラについては、あまり期待なさならない方がいいです）

では、遅くなった割にはそこまで長くないのは自分としても不本意ですが、読んで頂ければと思います、
どうぞ。

第４話　歓迎会……そして

放課後。
ようやく久しぶりの勉学から解放された私は席に座ったまま伸びをする。
一度やっているとはいえ、数年間学園から離れていた私にはとても懐かしく思えた。
しかしながら、これからまた毎日のように続くことを考えると、もう味わうことはない感覚なのかもしれない。
そんなことを考えていると、いつの間にやらちょうど私の席の斜め前の方にあやかが私の方を見て立っていた。

「あ、アスナさん、少しよろしいですか？」
「ええ。なんか用？」

今朝の出来事からあやかの様子がおかしい気もするが、それに関してだろうか？

「先日私が提言した通り、新任教師……つまりネギ先生の歓迎会を行う件についてなんですが、思ったよりお菓子や紙皿等が足りないようでして。申し訳ないですけど……その、アスナさんに買い出しを頼みたいのですわ」

なるほど、そっちの方か。
……そうすると私の懸念は杞憂なのかもしれない。
そう思って安心したところで、ある事を思い出す。

「あ～、買いに行く分には構わないんだけど、１つ用事があるから

それを併行してもいい？」
「え、ええ。そこまで時間がかかりさえしなければ」
……よし、これでいいだろう。
この歓迎会前には、ある人物の人生を変え始める出来事が起こる。
ただ、その目当ての人物はもう教室にはいないようなので……急がなければ。

「ありがと。じゃあちょっと行ってくるわね」
「……お願いしますわ」
「任せといて」
そう言って急いで教室を出ると、ちょうどそのお目当ての人物が廊下を歩いていた。
まだ教室を出たばかりだったようだ。

「本屋ちゃん！」
本屋ちゃんと呼ばれた当人……宮崎のどかは、私の突然の声に肩を跳ね上げた後ゆっくりこっちを向いた。
「あ……アスナさん。ど、どうかしましたか？」
この頃の本屋ちゃんはあのネギに大胆にアプローチしてたのと同一人物とはとても見えない。
けどそんな純粋で積極的な彼女に、『あの時』のような辛い思いをさせたくない。
それが例え偽善であったり、未来に影響が出ようとも、絶望に飲まれるのは私だけで十分だ。
……でも、ごめんね。

「これから買い出しに行くんだけど……」

〜〜〜〜〜〜〜

そうして、本屋ちゃんの本運びの手伝いをした私は急いで買い物を済ませ教室へ戻ると、もう既に歓迎会は始まっていた。

「アスナさん、お帰りなさい。少し遅かったですわね。もう始まってますわよ？」

「ごめん、委員長。はい、これ」

そう言ってあやかに買い物袋を手渡すと、あやかは中身を確認して微笑む。

「まあ、なかなか素晴らしい選択ですわね。イギリス出身のネギ先生に紅茶とジャムにケーキとは……」

「まあね。前にあっちの人は紅茶にジャムを入れるってなんかで聞いた事あった気がしたから」

流石にポットはないからペットボトルのストレートティーたが、それでも充分だろう。

「やはり、貴女は……」

「ん？」

「あ……いえ、なんでもありませんわ」

何やら呟いていたあやかだったが、私は構わずネギの居場所を聞くことにする。

……と、そのまま聞くのはまずいので
「あ、そういえば高畑先生はもう来てる？」
「え？あ、ええ、アスナさんの意中の方ならあそこでネギ先生の隣に座ってますわよ」
……いや、もう意中でもなんでもないというか、保護者的な感覚しか抱いていないとは口が裂けても言えないのでとりあえずあやかに礼を言った私は高畑先生やネギがいる方へと向かった。

～～～～～～

歓迎会も無事に終わり、後片付けも済ませた私と木乃香、そして今日から居候となるネギはゆっくりと帰路に着いていた。

「ほんと、今日は色々あったわね」
「せやな。ウチは楽しかったからええけど、ネギ君はどうやった？」
「ハ、ハイ！まだ少し不安はありますけど、なんとかやっていけそうです」

木乃香の質問にネギはそう答えると、両手を握りしめてやる気を表現した。
……やる気になる分には構わないんだけど、1人で抱え込んだりしなければいいのだが。

「うんうん、頑張ってな～。ウチらはネギ君の生徒やけど、手伝える事があったな言ってな～」
「そうそう、先生って言ってもまだ子供なんだからお姉さん達を頼りなさいね」
「え、えっと……」

何やら困ったような顔をしているネギ。
この場合、どうせ迷惑をかけたくないとかそんな感じな事を考えているに違いない。
ならここは忠告でもした方がいいかもしれない……よし、そうしょう。

「何？歯切れが悪いわね。もしかして迷惑をかけるわけには……とか考えてるんじゃないでしょうね？」
「え？な、なんで判ったんですか？！」

……ほらやっぱり。
人間1人じゃ出来る事なんて限られているのに、ネギの場合は無駄にスペックが高い所為でその範囲を軽く凌駕してしまっている。
ただそれも、あくまで『子供の域』でしかないのに本人はそれに気付いていない。
これはかなり危険なことなのだ。
だから、私は今の内になるべく判らせるという試みに出る。

「私にはね、親がいないの」
「え？」

ネギが心底驚いたような顔をしている。
そう、私にとって親と呼べるのは精々高畑先生くらいなものだ。
その高畑先生ですら今の私には保護者としか見てないのだから、実質いないと言っても過言ではない。

「そんな私に高畑先生や学園長は娘や孫のように良くしてもらってる。勿論してもらってばかりじゃなくて、毎朝新聞配達をしてちょっとずつ返してたりするんだけどね」

私の言葉をネギだけでなく木乃香まで真剣な眼差しで聞いてくれている。
そう認識すると少し恥ずかしくなってきたが、敢えて気付いてないように話を続ける。

「けど、高畑先生達が本当に望るのは私の健康とか身の安全だって気付いたの。そして、それが確かだとしたら私のすべき事って何なのか？ーーそれはきっと、無理をしないこと」

以前、私は無理な鍛錬の所為で死にかけた事があった。
そんな時、心配して必死に止めてくれた高畑先生には今でも感謝してもしきれない。
……それからだったっけ。
高畑先生に対する元あった恋愛感情がきれいさっぱりなくなり、保護者として見るようになったのは。

「でも、無理をしないってのは何もすることを制限しろって訳じゃないの。私が言いたいのは、もしどうしてもそれがしたいなら周りを頼れってこと。勿論、私達にも出来ない事や私達以外を頼らないといけない時があるでしょうけど、折角同室で住む事になったんだからまずは私達を頼ってほしいの。分かった？」
「アスナ……」
「アスナさん……ハイ！」

これでとりあえずいいだろう。
今のでネギが頼りしてくれるかは、信じるしかない。
隣で傍観してた木乃香も、涙ぐんでハンカチをあてている。
……なんでなのかは判らないけど、まあいいか。

「よし。さあ、帰りましょうか」
「……うん」
「ハイ！」

こうして私達は寮へと向かって歩き出したのだが、この時私は少し離れた所に隠れていたある人物の存在に気付いていなかった。

第４話　歓迎会……そして（後書き）

痛っ！？

い、石を投げないでください～。（挨拶）

さて、今回はいかがでしたでしょうか。
見所はやはりアスナがさとす辺りです。
かの言葉が後々効いてきますから。

次回は……そろそろ彼女達が動き出すので、その辺りを書くことにはなりそうです。

この度も読んでいただき、ありがとうございました。

第5話　対峙（前書き）

遅くなって申し訳ありません。
なかなか時間が取れなかったのと、何度も書き直したのが遅れた理由となります。

今回は皆大好きな彼女が登場。
ただ、この頃の口調やらに不安があるので、おかしいと思ったら指摘してくださると助かります。

それでは、どうぞ。

第5話　対峙

過去に戻ってきた翌日、外がまだ暗い時間に私は目を覚ました。
私のすぐ隣には、思った通りネギが抱きつくように眠っている。

「まったく、甘えん坊さんね……」

そう悪態を吐くように言いながらも、新聞配達の時間まで私は優しくネギと抱き合うのだった。

〜〜〜〜〜〜〜

そうして無事新聞配達を済ませた私は、人目につきにくい場所を探して基礎鍛錬を始める。
昨日一日過ごして判ったことだが、いくら技能や知識はあっても身体がなかなかついていっていない。
しかも、五年後よりも身長や体型も多少違う為かリーチの長さや重心の掛け方も微妙に違うのだから調整がとても重要になってくる。
なので、自分の現時点での能力の把握や能力の向上を促す為にも、この基礎鍛錬は入念に行うと決めた。

「ふぅ……流石に疲れはしないけど、全体的に能力が低くなってるのはショックね……」

如何に鍛錬といってもそこまで激しい動きでなかったり、若さがある分疲れは感じない。
しかし、いくら元のポテンシャルが高いといってもこの身体は十年近くあやかとの喧嘩や新聞配達で鍛えた程度でしかなく、良くて茶

々丸さんと互角に闘えるぐらいだろう。
そうなるとしばらくは一人で鍛錬をするにしても、いずれは刹那さんやエヴァちゃんにも鍛えてもらう必要があるかもしれない。
刹那さんとはあれからも度々会う機会があったからその都度稽古を受けさせてもらってたが、エヴァちゃんとは麻帆良を出る前に一度だけ会ったっきりだった。
だから、寂しがり屋のエヴァちゃんにはとても悪いことをしたと思う。
今更だけど……恩知らずな弟子でごめんなさい。
……本当に、今更な謝罪だった。

さて、せっかくなのでこのまま今後の方針も考えてみる。
まず、鍛錬の仕方についてだが、これは怪しまれない程度に行うのが良いと思う。
あまり大っぴらにやると学園長達に怪しまれるし、エヴァちゃんが動き出すまでは普通の女子中学生を装う方がリスクも少ない。
ただ、そうなると昨日のは今振り返ってみても学園長やエヴァちゃん達には私は相当おかしく映った可能性が出てくる。

「となると、しばらくは大人しくしてないとマズいかも……」

とは言っても今更なので、諦めるしかないだろう。
次に、今後の動きについては、さっき結論を出したように極力動かない方がいい。
このままいけば次に大きな出来事は図書館島の地下での一件だったはずだ。
これも出来れば事を起こさずに普通のテスト勉強に持ち込んだ方が良いのだが、私はともかくネギの成長には簡単で危険も少なく、今後の布石にもなるかもしれないから寧ろやるべきかもしれない。
……まあ、まだ少し時間はあるからその時にでも決めればいいか。

と、ここまで考えた時にはもう少しで木乃香達が起きる時間が迫ってきていることに気付いた。

「やっば！少し考えすぎたかも。早く……っ」

帰らなきゃ、と続けようとした時、それは突然現れた。

〜〜〜〜〜〜〜

「……」

「……」

……マズい、非常にマズい。

今私の目の前に立ってるのは、私の剣の師匠で親友の桜咲刹那その人だ。

いや、この時はそんな肩書きや交流なんてないのだが、今はそれどころじゃない。

やっぱり昨日は目立ちすぎた、そう反省せざるを得ない状況がここにある。

「……」

「えーっと……」

私の困惑を余所に刹那さんは喋らずただ私への睨みを強めていくだけ。

正直、刹那さんにここまで睨まれた事のない私には対処の仕方が思いつかない。

だから、とにかく話しかけてみることにした。

「お、おはよう……せ、桜咲さん」

「……おはようございます」

会話が、終わる。
いや、実際は挨拶だけなのだがあちらはこれ以上話す気がなさそうに感じる。
私はそれでも何とかこの場を凌ぐために再び話しかけ始める。

「こんな朝早くに……えー、私に何か用？」
「貴女は何者ですか？」

……いや、どうやら会話をする気満々だったらしい。
この雰囲気はただ単に警戒と刹那さんが演じている殺伐とした役柄が絡み合って出来ているだけのようだ。
昨日のあやかの質問と大差はないが、やはり受けるダメージが少ないのか昨日と違ってきちんと頭は回っている。
その頭で少しどうするか思案したが、ここは先ほどまでの考えを変えてこの状況を利用するのが一番だと判断する。
後は、行動するまでだ。

「何者って、私は私だけど？」
「いいえ、貴女は神楽坂さんではないはずです。その雰囲気は隠してるつもりでしょうが、『こちら側』のモノです」

……なるほど、昨日木乃香が感じてたのは大人の雰囲気とかじゃなくてそれか。

「仮にそうだとしたらどうするの？」
「……否定しないと？」
「質問に質問で返すのは頂けないけど、そっちが思うならそうかもしれないわね」

それを聞いて刹那さんは夕凪を構える。
殺る気満々って訳か。

「……お嬢様には手を出していないだろうな？」

……っと、敬語じゃなくなってる。
こうなると私の勝ちは頂きだろうか？

「木乃香の事ね。出してないわよ。けど、その質問は前提がおかしいと思うわ」

私は刹那さんが反応する前に、畳みかけるように話を続ける。

「もう手を出していた可能性があるのに、なんで昨日の内に対処しなかったの？」
「そ、それは……」

構えをやめる事はなかったが目線を逸らし、明らかに動揺している。
つまり、理由があるという事だ。
そして、私にはその理由がなんとなく想像出来る。
そこを突けば、活路を見いだせるはずだ。

「しなかったんじゃなくて、出来なかったのね」
「っ……！？」

そう、出来なかった。
いや、正確にはするなと言われていた。
……誰に？と言えばそれは勿論。

「学園長にこう命令された。神楽坂明日菜を監視するように、と」
そう、監視だけを命じられた。
だから昨日は不満や不安があってもそれに従事した。
なら、なんで今ここでそれに反したのか？
監視というのは時間を要する任務だ。
その期間に差はあれど、一日二日で判断するのは早計だしまずありえない。
つまり、そこには刹那さんが任務を翻したくなるような理由があるはずだ。
そしてそれも私には予想出来ている。
「せ……桜咲さんはさっきの私の行動を見たのよね？私が鍛錬している姿を」
「なっ……あ……」
どうやら当たりらしい。
つまりは私の鍛錬している姿を見て、明らかに怪しいと判断した。
……でも。
「本来ならそれだけじゃ接触までする理由にならないけど、相手は木乃香の同室の私。確実を選ぶ余裕を持てなかった。違う？」
「……仰る、通りです」
刹那さんが私の推理に頷いた事により、この詰め将棋のような会話が終わる。
しかし、本題はこれからだ。
「要求があるわ」
「……聞きましょう」

少し間はあったものの、素直に頷く刹那さん。
自身の汚点も含めて全部バレたのが結構堪えたのかもしれない。

「今度の日曜、私と勝負しない？」
「勝負……ですか？」

私はルールを説明していく。
決闘ではないので真剣を使わず木刀や竹刀等で代用する事と、私の新聞配達が終わった後に世界樹の前でという事を伝える。

「提案した以上その間は木乃香の安全は保障するし、桜咲さんが報告を誤魔化してくれれば勝負に勝つだけで私をどうにでも出来る。どうかしら？」

私が説明を終えて問いかけると、少し悩んだような顔をしたのち頷いた。

「わざわざ勝負などせずともこれだけ証拠があれば如何様にも出来ますし、万が一負けた場合を考えれば受ける義理はありませんが……神鳴流の剣士として受けない訳にはいきません」

確かに普通なら受けないけど、神鳴流としての誇りがそれを受けさせる。
要は、私はこの話に持ち込めさえすれば良かったと言える。
まあ、その為の粗探しだったという事だ。

「そういえば、貴女が勝った場合の話がまだでしたね」
「あ、あぁ。そうね……」

正直今言うべきか悩むところだけど、まあいいか。

「私が勝った時は、木乃香に桜咲さんの事を全てを話してもらうわ」

「……は？」

文字通り目を丸くしてきょとんとする刹那さん。

というか、この時点では奇跡のような表情ではないだろうか？

しばらくその顔のまま固まっていた刹那さんであったが、突然再起動するとこれまたなかなか見れない慌てぶりだった。

「なっ、ななな……なんですか！？それは！」

「じゃ、そういう事だから」

却下される前に私は踵を返して走り出す。

「ま、まちな……って、速いっ！？」

刹那さんが追いかけようとした時には、私はもうかなりの差をつけて逃げる事に成功した。

これ以降勝負の日まで隙あれば私に抗議しようとする刹那さんから逃げ回るという、ある意味平和な日々を送る事となった。

第5話　対峙（後書き）

と言うわけで、刹那との対峙をお送りしました。
てか、明日菜が大分頭脳的な意味でチートな気がするのですが、やりすぎだったかもしれませんね……。
とにもかくにも次回は初戦闘なので、上手く表現出来たらなと思います。

あと、惚れ薬関連は発生しませんでした。
まあ、今回はネギに高畑先生が好きだとか言ってないので当然ですが。
というかネギは今回喋ってないという……次回は出せるかすら不安なところですが、何とか出来たら出しますので。

質問、要望、指摘等受け付けておりますのでよろしくお願いします。

それでは、失礼しました。
また次回会いましょう。

第６話　ＶＳ刹那（前書き）

６話投稿です。
今回は今までで一番長いながらかなり早く執筆し終わる事ができました。
……まあ、一応確認はしましたがそれでも雑になってるところがあると思うので、見つけた方は報告のほどをお願いしたく思います。
それでは、どうぞ。

第6話　VS刹那

いよいよ刹那さんと勝負をする日となった。
この数日間は多少無理をしてでも鍛錬の時間を作りたいと考えていたのだけど、毎日刹那さんに追われ、お風呂でネギといちゃいちゃし、補習で怪しまれない為に高畑先生が来るまで態と合格点を取らないようにしたりと、思ったより時間が取れなかった。
それでも出来る事はしたつもりなので、後は刹那さんに必ず勝つだけだ。
折角作ったチャンス……モノにする他ない。
そうして私は改めて決意を固め、闘いの舞台へと向かった。

「……来ましたね」
私が世界樹の広場に到着すると、既に刹那さんは私がいた時にも使っていたデッキブラシを携えて待っていた。
ネギの死後、稽古用に使っていた得物がないので刹那さんに倣って私も同じデッキブラシにした。
刹那さんもどうやらそれに気付いたのか、意外そうな顔をしている。
「そんなに意外？」
「はい。私を尽く謀った貴女なら、刃のない刀等を持ってきてもおかしくないと思っていたので」
どうやら今の刹那さんにとっての私の認識はそれなりに悪いらしい。
けど、それにしたって失礼だから文句の一つでも言おうかと思うが、ここは我慢する。
「そう、じゃあ始める？」
「ええ。いつでもどうぞ」
気を取り直して得物（デッキブラシ）を構える。
まず、刹那さんの出方を伺う私だが、あっちもいきなり動く気はないらしく構えたままでいる。

そのまま数分お互い動かずにいたが、あっちの方が先に痺れを切らしたらしく、一気にこちらへ跳躍してきた。
「はぁっ」
「っ……！」
気で強化した得物同士がぶつかり合い、私はそのたった一合の衝撃と重さに僅かな呻きをあげる。
……刹那さんの剣戟ってこんなに重かったっけ？
一瞬そんな考えが頭を過ぎったが、刹那さんはそんな隙を逃さず続けざまに横から払うような攻撃を仕掛けてくる。
「くっ……」
「考え事なんてしている暇はありませんよ？」
何とか受け止める私を余所に、それを皮切りにあらゆる方向から連続した攻撃が飛んでくる。
二合、三合、四合……と徐々に私は後退りし押されていく。
そうして十合を越えた辺りでようやく攻撃が止み、刹那さんも距離を取って一息入れる。
「なるほど、勝負を挑んできただけあって多少はやれるようですね」
「はぁ、はぁ……」
予想以上だった。
てっきりこの頃の刹那さんは私が知っているのよりも弱いものだと思っていたが、決してそうではない。
少なくともその剣筋には迷いがなく、とても鋭い。
そしてそれを維持し、畳みかけるように連続で行う。
前の世界での、どんな状況にも対応出来るオールラウンダー的戦術とは全くの逆の力と技と速さで相手をねじ伏せる……これが本来の刹那さんの戦術。
……どうしよう、これは目測を誤ったのかもしれない。頬を伝う汗が、とても冷たく感じた。
「さて、些か早くはありますがそろそろ終わりとしましょう」
……来る。

私は片足を後ろに一歩出し、踏ん張るような体勢をとる。
「いきます……神鳴流奥義……百花繚乱！」
その言葉と同時に私の全身に風圧のような衝撃が奔る。
「きゃっ……ぐぅっ！？」
突然、私の身体が浮いたかと思った。
……しかし、そう思った時には私は既に地面に叩きつけられていた。

「……これを受けてまだ意識があるとは。まあ、それでももう立てないでしょう？降参してください」
地面に這い蹲るような体勢からの視線の先には、笑っているようにも怒っているようにも見える刹那さんの姿。
……負けた？
確かに身体中に痛みが奔り、立つにはかなりきつい状態だと自分でも判る。
……けど、立たなきゃ。
立って、刹那さんに勝たないとーー。
「……まだよ。まだ、終わってない……！」
言って、私はふらふらとなりながらも何とか立ち上がる。
「なっ！？正気ですか、貴女は！？」
自分でも満身創痍なのは判ってる。
けど、私は諦めるわけにはいかないし、まだ手は残ってる。
例えそれが駄目だったとしでも、また違う手を考えるまで。
要は全身全霊……惜しみなく戦うだけ！
だから、『アレ』を使う。
「左手に魔力……右手に気」
得物を地面に置き、ポーズを取る。
「な……？」
「感卦法！！」
私がそう言って両手を会わせると、身体中に力が漲る。
これこそが気と魔力を合一させる事で桁違いの能力を一時的に得る

高難度の技法、感卦法。
本来、これを拾得するにはかなりの時間が必要となるが、私はそれをいとも簡単に使用出来る。
「くっ……まさか、こんなモノを使えるとは……貴女に対する認識を改めないといけませんね」
「別に……いいわ。今からそれじゃ、後から大変だろうし」
さっきのダメージがまだ効いているらしく、少し言葉がつっかえる。
が、そんな事を気にしている場合じゃない。
「今度は、私からいくわよ……」
そういって、瞬動で一気に刹那さんの前に飛ぶ。
「なっ！？」
「そこ！」
驚く刹那さんを尻目に、今度は私が刹那さんを追い詰める番だった。

あれからどれほど経ったか。
私は何度も感卦法を用いながら攻めつ、攻められつつの攻防劇を繰り広げた。
お陰でお互い肩で息をしていつ倒れてもおかしくない状態だ。
「はぁ……はぁ……まだやる気、ですか？」
「ふぅ……ふぅ……当たり前、よっ」
振り絞るような私の斬撃を、歯を食いしばりながら受け止める刹那さん。
最早、これをお互い交互に行うという堂々巡りに入っていた。
だからだろうか、刹那さんが決心したような顔つきに変わったのは。
「くっ……はぁ……そろそろ、決めましょう」
真っ直ぐ私を見据える視線にはさっきまでの邪険さはなく、まるで歴戦の戦友と健闘を讃え合うような……そんな実直さを感じた。
だから私も、それに応える。
「ふぅ……はぁ……そうね。次で……最後にしましょう」
言って、お互い距離を取る。

次の一撃で、全てが決まる。
まず動いたのは、刹那さんだった。
「はぁぁぁぁ！神鳴流奥義……斬岩剣！！」
岩をも切り裂くその剣技が、私に向かってくる。
私はそれを、敢えて受け止める体勢を取った。
「終わり、だぁぁぁ！！」
刹那さんの声がとても響き、彼女の得物が私の得物と衝突した。
「ぐっ……！？」
ー衝突したと同時に私の得物が真っ二つに割れ、そのまま私の右肩に直撃する。
私は痛みで叫びそうになりながら、それでも左手の力を抜かずに気を練り上げる。
「な……しまっ……！？」
刹那さんもそれに気付いて声をあげるが、もう遅い。
……私の渾身の一撃を、食らえぇ！！
「いっけぇぇぇ！！神鳴流奥義！斬空掌ぉぉ！！」
掌に練り上げた気を、弾丸のように打ち出す神鳴流奥義、斬空掌。
殆ど鍛錬を行ってない今の私に撃てるか正直賭けではあったけど、見事刹那さんの腹部に……しかも至近距離で命中させた。
「ごぷっ！？」
身体を九の字に曲げて吹き飛び、胃液だか唾液だか解らない液体を吐き出す刹那さん。
その刹那さんが地面に倒れ伏す姿を見て、私は力が抜けると共に目の前が真っ暗になった……。

「んぅ……え？」
私が目を覚ますと、そこには刹那さんの顔があった。
「起きましたか、神楽坂さん」
昔と同じ、優しい声。
「う、うん。……ここは？」

私が起きた場所は、世界樹のある広場ではなく寮の一室……もしかしてここって。
「私と真名の部屋です。真名には事情を話しておきましたので、貴女がここにいるのを知っているのは私達三人だけです」
そっか、龍宮さんとも話をつけないとって思ってたけど、これで少しはやりやすくなるかな。
……って、そうじゃない！
「そ、それよりも！勝負は！？勝負は……ぐっ！？」
私が慌てて起き上がろうとすると、右肩に鋭い痛みが奔った。
「あ、駄目ですよ安静にしておかないと。一応気功で治療したのでそれほど時間を要さないはずですが、罅が入ってましたからしばらくは動かせないと思いますよ」
どことなく苦笑するような雰囲気で私に言い聞かせる刹那さん。
勝負するまでの態度とは打って変わって優しい対応に一抹の不安を覚える私だったが、その懐かしさと心地よさに委ねていいのでは……とも思った。
「勝負については、より有効な攻撃を与えた貴女の勝ちです。事実、真名が私達を見つけるまではお互い気絶してましたから。私は本気を出して貴女に負けたのです」
別段悔しそうでもなく、寧ろ清々しいくらいの笑顔で刹那さんは負けを認めていた。
……勝てた。
実感は沸かないが、あちらが認めている以上否定はしなくていいだろう。
というより、こんな笑顔で言われたら否定出来ないというものだ。
「じゃあ、約束通り木乃香に全てを話して、木乃香と仲直りして」
私の言葉に、刹那さんは困ったような表情になる。
「それは……そもそも、貴女は私をどこまで知っているんですか？」
「全部。烏族とのハーフとか昔木乃香を護れなかった事とか翼が白いのとかも含めて全部」

刹那さんの肩が小刻みに震える。
恐怖を感じたのかその顔は強ばり、今にも逃げ出しそうですらあった。
「そんな……それを、お嬢様に話せと？……無理です。絶対に……拒絶される」
やる前から諦めてしまっている刹那さん。
正直、イラッとしてくる。
「じゃあ、貴女が木乃香から一歩退いてるのはいいって言うの？木乃香は、貴女が歩み寄ってくれるのをずっと待っているのに」
修学旅行以前の刹那さんは、過去の出来事から木乃香から離れて護る事を決めていた。
それを前回は最高の形で収める事が出来たけど、今回もそうなるとは限らない。
だから私は、刹那さんが接触してきたのをチャンスだと思った。
確かに鍛錬の相手や味方を増やすなんていう目的もあったけど、一番はやはり二人が仲良くしている姿が見たい。
その為に私は危ない橋を渡ると解っていても、賭けに出る他なかった。
「確かにそうですが、それとはまた……」
「大丈夫よ」
「え……？」
そう、大丈夫。
「木乃香は刹那さんが大好きだから、だからきちんと向き合って話せばきっと受け止めてくれる。大事なのは、わずかな勇気。それがあれば、きっと魔法のように貴女の願いを叶えてくれる」
そう、わずかな勇気こそが本当の魔法。
それは私がネギに初めて教えてもらった、最高の魔法だ。
そんな私の言葉が届いたのか、刹那さんは不安を感じてるようにしながらも力強く頷いてくれた。
「判りました、約束します。お嬢様に全てを話す事、そして、貴女

が何者なのかも聞きません」
「へ？聞かないって……そんな約束したっけ？」
私は確か、木乃香との事しか約束してないはずなんだけど。
「言ってたじゃないですか。私が勝ったら、貴女をどうにでもしていいと。けど、負けましたからそれは出来ない。つまりはそういう事です」
うわ、真面目な刹那さんらしい。
「ふふふ、ありがとう」
「いえ。それよりも、今聞かないと言ったばかりですが幾つか確認も兼ねて質問してもいいですか？答えられなければ答えないでいいので」
「ええ、いいわよ」
まぁ、私としても全部を隠すつもりはないのであっちが納得いく程度には答えよう。
「まずは質問ではないのですが……何度か私の名前を言いかけたりしてますけど、呼びにくいなら名前で呼んでください」
「あ……バレてた？というか、さっきバッチリ名前言ってたわね。なら私も名前でいいわよ、刹那さん」
「はい、判りました……明日菜さん」
左手で握手を交わし、前の世界と同じように友人と認め合う形となった。
「次に……答えられないかもしれませんが、貴女は本物の明日菜さんなんですよね？」
「ええ。私自身は、神楽坂明日菜だと確信してるわ」
まあ、なんで五年前から戻ってきたのかとかっていう謎はあるけど、それは間違いない。
刹那さんはしばし考えるように顎に手を当てて俯き加減で黙っていたが、軽く頷くとまた口を開いた。
「では、何故神鳴流や感卦法が使えたのですか？」
あ～やっぱり気になるか。

けど、それは。
「ごめん、それは言えない。言えてもある人に教わったとしか……」
まあ、教えた本人が目の前にいるんだけど。
「……判りました。では最後に、貴女の目的は何ですか？」
「……目的？」
何者なのが聞けないからその行動原理を聞きたいって訳か。
うん、刹那さんにも今後色々手伝ってもらうだろうし、それくらい説明しないと信用は得られないわよね。
「私は皆が幸せと感じられるような、そんな未来を護りたい。それが目的」
「皆の幸せを、護る……？」
そう、あんな『未来』は二度と繰り返したりはしない。
確かにあれはあれで救われた人もいた。
けど、やっぱりそれよりも悲しい出来事が多すぎたと思う。
だから、それを知ってる私が頑張らないといけない。
けど、私だけで出来るなんて勿論考えてない。
それは私自身がこっちに来る直前まで痛烈に感じていた事だ。
だから、刹那さん。
「隠し事してるのにこんな頼みをするなんて烏滸がましいと思う。
けど、どうか私の目指す未来を……手伝ってください！お願いします！」
私の切実な願い。
それが善悪のどちらになろうとも、それだけは成し得る。
……だってそれは、ネギを護る事にも繋がるはずだから。
刹那さんはしばらく私の目をじっと見ていたが、何か得心すると私に微笑みかけてくれた。
「判りました。いきなり貴女を信頼出来るとは思いませんが、私なりに貴女の手伝いをすることを約束します」
「あ……」
私は、泣いていた。

ネギを護れなくて、沢山の人を護れなくて、その度に泣いていた私はとても久しぶりに違う理由で泣いていた。
嬉しい……その気持ちいっぱいで。

第6話　VS刹那（後書き）

という訳で、刹那戦でした。
見応えなんて全くなかったと思いますが、まあこれが自分の限界かな、と。
刹那も含めて戦い方なんて研究してないんで、おかげでなんか創作も創作な戦闘になっています。

さて、今回割と早い更新となりましたがこれには自分なりに理由があります。
それは、ここ最近の月一更新です。
自分としてもこれは何とかしたかったですし、時間等がきちんとあれば早く更新出来るんだと示したかったのです。
なので、今回の更新は自分にも自信に繋がる良い機会であったと思います。
夏休みという期間を上手く利用してなんとか今までの鬱憤を晴らしたいと思います。

次回はスーパーこのせつターイム！になると思います。
……自分に甘々が書けるのか少し心配なのは、まあ内緒です（苦笑）

それでは、また次回でお会いしましょう。

第1話　始まりの朝（改訂版）（前書き）

まずは謝罪を。

この度は、長期に渡る更新の停止等があったことを深く謝罪申し上げます。

申し訳ありませんでした。

今回の件に関して言い訳をしてしまうならば、まず、姪っ子が患った気管支炎が母親を介して自分にも懸かり、しばらくダウンしていました。

一応治ったと診断されたものの、その後も胸の辺りの違和感が抜けない錯覚に陥って小説を書けるようなモチベーションに持っていけないまま新年を迎えてしまったのです。

そして、新年早々事故に遭いました。（正確には一月二日）

幸い入院はしませんでしたが、骨折もあったので大学や私生活に支障が出たりもしました。

おかげで完治後はレポートやら追試・再試に追われながら何とか進級……したものの、今度は大学の移転で六月に入るまで環境に慣れない日々を過ごしました。

そして、ようやっと書こうと思ったら情報を纏めていたＵＳＢが破損していて全部おじゃんになっていた……というなんとも奇妙な偶然が立て続けに起こっていたのです。

それでも、更新が遅れたのは自分の怠慢故のものでもあったのでやはり申し訳ないという言葉を発さずにはいられなくなります。

本当に申し訳ありません。

今回、改訂版という題目で再投稿に近い形で載せたのは原作の内容との矛盾を少しでも埋める為に設定を一から考え直している最中だからです。
この第一話に関しては元のが短かったこともあってあまり変更する点がないと判断し、より細部の表現を加えて少しでも早く皆様に諦めていないことをお伝えしたかったので投稿を決意しました。

尚、一応改訂版と銘打っていますが、今後の設定等の調整次第ではまた書き直す虞がありますことを留意していただければと思います。

長くなりましたが今後とも本作品の応援の程、どうか宜しくお願いします。

アクベンス

第1話　始まりの朝（改訂版）

瞼に感じる暖かな光と小鳥の囀り、どうやら朝になったようだ。
……けど、なんだろう。妙に心地よくて起きたくなくなる。
昨日は確か森の真ん中で野宿をした筈……なのだからこんな気持ちになる訳ないのに、私は久しぶりに感じたこの感覚にしばらく身を委ねることにした。
……それから数分が経ったが、依然として状況は変わらない。
てっきり夢でも見ているのかとも考えたがそういう訳でもないようなので、私はいよいよ覚悟を決めて瞼を開くと、その先にあったのは、私の予想した風景ではなかった。

「……え？　ここ……は？」

さっきも言ったが、私は昨日森で野宿をしていた。
寝袋など持っておらず、慣れているとはいえ地面から少し飛び出していた木の根を枕代わりにするという、とても満足な寝心地を味わえる環境ではなかった。
しかし、今は布団で横になっており、目の前に天井と壁が見えるとなるとどこかの室内だと判る。
しかも、なぜか背後には人の気配……というより寝息まで聞こえてくるが、敵意は全く感じられない。
自分も寝ていることを察するにおそらく二段ベッドなのだろう。
ただはっきりとした身の安全が確保できていないので、名残惜しくはあるが起き上がることを決意した。

「……って起き上がるだけなのに大袈裟かしら」

そんな事を呟きながら腰を曲げて起き上がると、予想通りの普通の

布団だった。
自分の格好は昨日まで着ていた弊衣破帽なものではなく、なんとなく見覚えのあるパジャマであった。
……一体どういうことなのだろう？
疑問ばかりが浮かび上がるが答えは出てこず、私は何か答えに繋がる情報はないかともう一度周りを見回した時、それを見つけた。

「携帯……電話？」

自分が寝ていた布団の枕元に、一台の携帯電話が置かれていた。その携帯電話を手に取った私は徐に画面を開くと、待ち受け画面には高畑先生の顔が映っていた。

「……これ、もしかして私の携帯？」

携帯のメニューからプロハァイルを開き確認すると、そこには確かに神楽坂明日菜の文字が書かれている。
ほぼ間違いなく自分の携帯とみていいだろう。
だが、よくよく見てみればこの携帯は随分昔に無くしたものだと気付く。
何故無くした携帯がここにあるのか考えていると、そういえばさっきは高畑先生の写真にばかり気を取られて時間を見てなかったことに気付いた。
慌てて時間を確認した私はその日時に愕然とする。

「ご……五年前？」

画面には確かに年月日と日時が表示されていたが、それは私が記憶している今の年と全く異なっていた。
画面の右上に書かれた日時、そこにははっきり五年前の二月と表示

されている。
つまりこれは……

「私……中学生の頃に戻ってる？」

ということになってしまう。
……はたしてそんなおかしなことがあるのだろうか？
いや、超さんの事例もある以上、まだ決めつけるには早すぎる。
だからさっき考えた通りまずは周辺の確認とかを済ませて情報を集めるのが先だろう。
そう考えが至った私は携帯を再び枕元へ置いて改めて周りを確認すると、ここが携帯と結びつく場所であることが判る。
ベッドから床までの距離を考えれば思った通り二段ベッドで、それに繋がるようにロフト、リビングらしき空間には机等がありその机の上には占い全集と書かれた本が置かれていた。
そしてその奥にあるキッチン等の間取りや物の配置……ロフトが物置になっていること以外の違和感のない、私と木乃香の部屋だった。
そうなると下で寝ている人物が気になり私は下のベッドを確認すると、そこには血色も良く、穏やかな顔で眠る木乃香の姿がある。
あの時再会した時よりも断然健康的に見えるし、これはますます過去に戻ってきている可能性が高まったが、ふと自分の状態が気になった。
私はベッドから降りて洗面台に向かうと、備え付けられた鏡で自分の姿を確認する。
そこに映ったのは確信に近いところにまできていた私の考えをまさしく肯定する、五年くらい前の自分の姿だった。

「わ、若返ってる？　待って、確か超さんのは時間だけ変わってた筈なのに……そ、そうなると別の原因があるってことになるのかしら？」

そもそも超さんは未来に帰っているし、カシオペアは持ってないのだからこの可能性は低いはずだ。
そうなると最近の出来事の中に何かヒントがあるのかもしれないし、とりあえず直接的な関係がありそうな昨日のことについて思い返してみる。
確か昨日は……殆ど一日中森の中を進んでいた。
理由は……そう、一昨日受けたネギの祖父たるウェールズ魔法学校の校長先生の依頼で昨日いた筈の森の何処かにいる魔法具の盗賊団を捕まえる仕事を受けたからだ。
本当なら龍宮さんも同行する手筈になっていたが、急遽入った仕事に私が一人でも大丈夫と言って向かわせたので一人行動だった。
一昨日は現地近くの村の宿屋に宿泊して昨日は森へ。
ただ思ったより広い森だった為に捜索は捗らず、昨日は結局野宿をすることになったが感づかれない為に火を焚かず、持ってきていた乾板を貪りいつものようにトラップを張って眠りに着いた。
もしトラップに引っかかったり万が一トラップを抜けてきても、私に近づけば気付く筈なので少なくとも外的なものが原因とするのは難しいはず。
そうなると自分に問題がある可能性が出てくるが、自分の身の上は理解していいてもそれはやはり有り得ないと判断出来る。
確かに私は様々な危険や災厄を起こしているが、流石に時間移動のような芸当はできない……と思う。
なんだか段々と自信がなくなってきたが、前触れらしいものがない以上は自分の所為ではない、多分。
……それから数分考えはしたもののやっぱり情報が足りないという結論に至った。
過去に戻った理由は解らず仕舞いになったが、ただ一つ新たに判明したことがある。
さっきロフトが物置になっていたがあれはまだネギが来ていないこ

とを指している。
そして今は五年前の二月……確かアイツが来たのも時期としてはこの辺りだったはず。
そうなるとアイツが死ぬまでに少なくとも半年の余裕がある。
だから、もうやるべきことは決まっている。

「今度は……今度こそはアイツを……ネギを護りきってみせる！」

私は決意を胸に、力を拳に込めて誓いの言葉を発した。

第2話　再会（改訂版）（前書き）

どうも、大変長らくお待たせしましたが第二話改訂版を書き終えました。
正直改訂前の倍の量の文章になったのでグダってないか心配で仕方ないのですが、できる限り読めるものにしたつもりなので良ければ読んでいっていただければと思います。

それでは本編へどうぞ。

第2話　再会（改訂版）

朝目覚めたらなんと過去に来ていた……なんて突拍子もない話は、精々漫画程度の夢物語に過ぎないーー昨日までの私ならそう考えていただろう。
実際、今でも信じているとは言い難いものがあることは確か。
しかし、それでも今起こっているのは紛れもない事実……これを否定する根拠を、私は持っていない。
……だとすれば、これから何をすべきか？
そんなの決まっている、今度は何があろうとネギを護る。
しかし、そんな決意を胸に宿した私にある事実が判明した。

「え？　今日がネ……新任教師を迎えに行く日なの？」

なんと、今日がそのネギを迎える日だった。
……偶然、なんだろうか？

「せや。なんやアスナ、先週バイトの休みまで貰って準備しとったのに忘れてたん？」

……いや、そんな五年も前のことをスラスラと思い出せる訳ないじゃん。
だがそんなことを木乃香に言える筈もなく、私は頭の中だけで愚痴る。
しかし、そうなるといきなり再会という流れになってしまうのだがはたして大丈夫なんだろうか……？

・・・・・・・

「アスナー、はよ着替えんとご飯が冷めてまうで～？」

……判ってる。それは判ってるのよ、木乃香。

けれど、制服に着替えるというのは女子中学生としてはなんらおかしくはないが、精神年齢が二十歳を越えている今の私にはどことなく恥ずかしい気持ちになってしまうのだ。

さっきネギを護るなんて言った私も、加齢や価値観の変化による弊害に早くも挫けそうになっていた。

けど、そんなことをいつまでも拘っていても仕方がない……そう考え直した私は意を決して着替えると、見た目相応の女子中学生に早変わりした。

……で、着てみて思ったがなんというかやはり生地が上等なだけあって着心地は良いし、寒いこの季節でも暖かく感じる。

さっきまでの恥ずかしさはどこへやら、なんだか懐かしさとかで涙が出そうになってきた。

「アスナ～？」

「……はっ！　あ、ごめん木乃香」

木乃香の言葉でようやく我に返った私は、急ぐように朝食を取るのだった。

・・・・・・・・

朝食を済ませた私達は女子寮を出て一路中等部校舎へ向かう。

久しぶりの麻帆良の景色に私は少しだけ心が躍ったが、まだ早い時間な為か同じように登校している人は殆どおらず、今日はあの怒濤の登校シーンは見れないようだ。

「人全然いないわね。ちょっと早かったかしら？」

「ん～、けどおじいちゃんは早めに来といてって言うとったし、ええんやないかな～」

私のちょっとした疑問にローラースケートで軽やかに走る木乃香はにこやかな顔を浮かべて答えてくれた。

この朗らかな頃の木乃香との普通の会話、つい昨日までなら有り得なかったことだ。

前の世界（昨日までいた世界）での木乃香は、東方一の治癒魔法使いとして名を馳せたものの詠春さんが暗殺されたことで統率を失った関西呪術協会や世界に蔓延る悪魔等から狙われる立場となったが、祖父たる学園長の管理下の元マギステル・マギとして刹那さんと旅をしていた。

元々裏側……こちら側とは詠春さんの教育方針上無関係だった木乃香には、狙われ続けるという立場やネギを救えなかった自分の魔法と今の称号とのギャップに猛烈なまでのストレスを感じ、それが大変な負担となって襲いかかっていた。

ある地で偶然再会した時も、見るからに身体が痩せ細って優しかった微笑みにも影が射し、刹那さんに対しても頻りにありがとう、ありがとうとまるで謝るかのように繰り返すばかり。

その際刹那さんは涙ながらにもう戻れない所まで来てしまったと語り、一言私に別れを告げて木乃香と共にその場を立ち去っていった。

……あんな姿を見てしまっている以上、過去に戻ってきた私はこの笑顔を可能な限り最高の形で護らなければならない。

ただそれは、私の存在が執拗について回る。

ネギや詠春さんも含めた沢山の人が死んだり世界があんな風になったのは、たとえどんなに様々な陰謀に巻き込まれた形だとしても結局は私の所為だった。

そんな私にはあまりにも不相応な願いなのかもしれないが、それでも私は『あの時』決めたのだ。
何か願いや夢がある限りそれに向かって努力を怠ることだけはしない……たとえそれがいくら無駄になろうとも。
ここまで考えていた私は一度内心で自分を嘲笑う。
私は最初ネギを護るとだけ言ったのに、今はネギや木乃香だけでなく助けたい、救いたい人皆を護りたい……そんなことを考えている。
本当にどこまでも欲張りだけど……それでも良いよね、ネギ。

「……アスナ？」

そこまで考えていた私の耳に、木乃香の心配そうな声が響く。
……いけない、今は木乃香と一緒にいるんだった。
私が慌てて木乃香の方に顔を向けると、予想通り親友の顔が心配そうに私へと向けられていた。

「あ、ごめん、何かだった？」

「あ、ちゃうねん。えっと……そない大した話やなかったんやけど、ウチが話しかけたらなんやアスナ難しい顔しとったから心配なってな。朝から気になっとったけどもしかして身体の調子でも悪いん……？」

不安そうに身体の調子を尋ねてくる木乃香に、私は申し訳ない気持ちで一杯になる。
なんとか誤魔化さなければならないが、どうしたものか。

「あ～……え～っと、実はちょっと変な夢見ちゃったのよ」

「変な夢？」

「そう、なんか世界にどこからともなく大量の人が移住してきて、元々世界にいた人達が大混乱になるの。で、その混乱に乗じて大量の怪物が世界を征服しようするって内容だったの」

「はぁ～、よう解らんけど確かにおかしな夢やなぁ～」

私のあまりの現実味のない内容に、木乃香は目を丸くして頭に？マークを浮かべているような状態になる。

「確かに私もわけ解んないと思ったけど、なんか妙に現実的に感じたのよ。だからなんか気になっちゃって」

「あ、確かにウチもそんな感じのする夢を見たことあるな～」

うんうん、と私の説明に頷く木乃香に私はほっと内心で息を吐く。……ひとまずこれで安心みたいだけど、魔法すら知らないことになっているのに怪しまれるのは危ない気がするし、今後は気を付けていかないと。

私はそう肝に銘じたのだった。

・・・・・・・

さて、待ち合わせ場所である校舎の玄関前に到着した私達は会話をしながらネギが来るのを待っていた。

「さてと、着いたのは良いけどまだ来てないみたいね」

「せやな。多分電車経由で来るやろうしもうちょいかかるかもしれへんな～」

その電車の時間などとうに忘れてしまっている私には、そうなのかと反応する他ない。
一応二人部屋なのは私にとってこの日だけなので、できるだけ木乃香と話をして純粋に楽しんだり情報を集めたりしたいところだ。

・・・・・・・

それからしばらく経ってようやくネギが走ってこっちに向かってくる姿を確認した。
木乃香もそれに気付いたらしく、少し驚いたようにネギが向かってくる方を見ている。

「なんやろ、子供がこっちに向かって来とらん？」

「本当ね。何なのかしら」

木乃香の質問に対して私は努めて平静を保ちながら答える。
段々と近づいてくるその姿は間違いなく私の知るアイツの姿、感動やら何やらで頭がどうにかなってしまうのではと感じるくらいに心が踊っている。
……そして、ついに再会する。

「えっと……すみません。もしかしてお迎えの方でしょうか？」

「へ？」

ネギは私達の前まで来るといきなり質問をしてきたので、木乃香はポカンとなって反応が出来ないでいる。
なのでここは私が返事を返しておくことにする、木乃香に不審がら

れない程度に。

「迎えって確かに私達は今日ここに来る新任教師を待ってたけど……もしかしてその人の子供さんか何か？」

「……あ、なるほど。せや、普通に考えたらそうやん……」

私の言葉に合点がいったのか、木乃香は恥ずかしそうに呟いているが私には全部聞こえているのだった。

「あ、いえ……僕がその教師です」

「へ？　……ええ！？」

しかしそんな木乃香にネギは申し訳なさそうにしながらも容赦なく現実を突きつけた。

それに対して木乃香は声を出して驚き、私もまるで今知ったように驚いた顔になる。

こういった事をするのは勿論できるだけ周りに怪しまれないようにする、これが基本指針だからだ。

「子供が教師って……本当に？」

「は、ハイ。今日からここで英語の教師を務める事になりました、ネギ・スプリングフィールドと言います。え～と、よろしくお願いします！」

再び私が問いかけると、所々しどろもどろにはなったもののきちんとした挨拶を見事にやり遂げたネギ。

……本当に過去に戻ってきたんだな。

自分が過去に戻ってきた事は朝起きてから何度も疑ったが、ネギの姿を見た以上これは信じざるを得ない。
ただ思ったよりも涙を流したり等の感動があまりないのは、それだけ大人になってしまった……ということなのだろうか？
いや、他にも理由はあるかもしれないがそれはともかく、少し前まで『早く大人になりたい』と思っていたのに、そう考えると私は少し寂しい気持ちになるのだった。

「び、びっくりしたわ～。ホンマに先生やなんて、まだ子供やのにすごいな～。はじめまして、おじいちゃん……学園長の孫の近衛木乃香言います、よろしゅうな～ネギくん」

「……いや、木乃香も十分凄いと思うけどね。私はまだアンタが先生なんて信じてないんだけど、一応挨拶すると木乃香の友人の神楽坂明日菜。明日菜でいいわ……よろしく」

相変わらずの順応の早さでネギを受け入れる木乃香に逆に凄いと感じてしまったが、木乃香が挨拶をしたので私も訝しむような発言をしつつ自己紹介をする。

「このえこのかさんとアスナさんですね。まあ、どこの国でも子供の教師なんてまずいませんから仕方ないですよね……」

そう言って少し落ち込むネギに私は少し言い方が悪かったと感じてフォローを入れようとした時だった。

「お～い！」

突如頭上から男性の声が響き、声のした方を向くと校舎の窓から手を振る高畑先生の姿があった。

「あ、タカミチ！　久しぶりー！」

ネギもその存在に気付いたらしく、大きく手を振りながら高畑先生のいる方へ近づく。

それに対して少し待っていてくれ～という声と共に窓から姿を消し、しばらくすると私達の所までわざわざ降りてきてくれた。

「お、アスナ君やこのか君もいたか。おはよう、二人とも」

「おはようございまーす」

「おはようございます、高畑先生。あの、その子が新任の教師だって聞いたんですけど……」

「ああ、うん。本当だよ、それは」

高畑先生の言葉に私はできる限り驚いた顔になるようにする。

そんな私の態度をスルーして高畑先生はネギに再び話しかける。

「ようこそ、麻帆良学園へ。どうですネギ先生、いい所でしょう」

「うん！　広いし人も多いし凄いね！」

いかにも子供らしい反応に高畑先生も含め私や木乃香も微笑ましい雰囲気になったが、すぐに高畑先生がその空気を切り替える。

「おっと、僕はこれから少し寄る所があるんだった。こっちに降りてきたのもそれが理由でね。それですまないがアスナ君にこのか君、ネギ先生を学園長の所まで案内してくれないか？」

「あ、はい。判りました」

私がそう言うと高畑先生は頼んだよと言って立ち去っていった。

「さ、それじゃあ高畑先生にも頼まれたし学園長先生の所へ行きましょ」

「せやな」

「はい」

私の言葉に二人も納得し、私達は学園長室まで向かうのだった。

・・・・・・・

「おお～、遠い所からよく来たのう……歓迎するわい。儂はこの麻帆良学園の学園長を務める近衛近右衛門じゃ」

「……あ、ハイ。ネギ・スプリングフィールドです、これからお世話になりますがよろしくお願いします！」

相変わらずの凄い頭と老成した独特の笑みを浮かべて歓迎と自己紹介をする学園長。

そんな姿にネギは一瞬驚いたようたが、すぐに立ち直りぺこりと頭を下げて挨拶をする。

「うむうむ、元気でよろしい。アスナちゃんやこのかもご苦労じゃったの」

「いえ、学園長先生の頼みなら断る理由もないですし」
「大した事やないから大丈夫やよ」
私達の言葉に満足がいったのか、学園長は何度か頷いた後に再び視線をネギへと向ける。
「さて、大体の事情は伺っておるが将来目指す職業の修行の為に教師として働くという事で良かったかの？」
「は、ハイ。それで合ってます」
マギステル・マギ（立派な魔法使い）になる為にここに来たというのは、どう考えてもあっちの校長とこっちの学園長とで作為的なものを感じるのだが、二人とも何もしていないと尋ねた際に話していたのを思い出す。
その時は半信半疑だったが、今考えるとそれは事実であり、寧ろ私が呼び寄せたとも考えられは……いや、やめておこう。
「ふむ、随分と大変な修行になりそうじゃな。とりあえずあやつと相談した結果、今日から三月までは教育実習としてアスナちゃん達のクラスの担任をさせて、その後の事はまたその時までに伝えることに決まったんじゃが……どうじゃ、やれそうかの？」
学園長の言葉を受けてネギは一瞬こちらを振り返るようにして見てきたが、すぐにまた学園長の方を向いて姿勢を整えた。
「ハイ！やります、やらせてください！」
「うむ、よい返事じゃ。……して、ネギ君は彼女はおるかの？　ど

うじゃ？　行く行くの世継ぎにうちのこのかなぞ」

「ややわ～じいちゃん」

ネギの言葉に満足した様子の学園長はそのまま見合い話を持ちかけようとしたのだが、さっきまで横にいた筈の木乃香がいつの間にか学園長の横に立ってどこから取り出したか判らないがトンカチで頭を殴るという芸当を見せた。

……え、何？木乃香って瞬動使えたの？

何となくまた一つ木乃香の謎が増えた気がするが、今は気にしないことにしよう。

「あ～、こほん。さて、教育実習のネギ君が担任ということで、始めは色々問題も多いじゃろうから指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君、入りたまえ」

「はい」

声と共にドアを開いて学園長室に入ってきたのは、日本ではまず見かけないであろう美女だった。

……そういえばいたな、こんな人。

「わぷっ」

が、文字通り有り余る胸を持つ彼女はネギに気付かなかったらしく、顔に胸を押しつけるようにぶつかってしまう。

「あら、ごめんなさい」

「い、いえ」

会話だけを聞くと何の問題のないやりとりなのだが、お互い未だにくっついたまま離れないのはどういうことなのだろうか？
……まあ、ネギはともかくしずな先生はわざとだろうけど。

「羨ましいのう……解らない事があったら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「は、ハイ……」

そう言ってようやく離れて学園長の横にまで来たしずな先生。
その際学園長が一瞬彼女の胸の辺りを見つめていたのは……無視しよう、さっきの呟きも含めて全力で。

「さて、大体話は終わったのじゃがまだ一つ問題があっての。これはこのかやアスナちゃんにとっても重要な事じゃ」

学園長の顔が真剣なものになったのを感じ、私や木乃香も含めて息を呑む。

「実はまだネギ君のこれから住む部屋を用意できなくての。すまないんじゃがしばらくはお前達の部屋に泊めてもらえんかの？」

などという爆弾発言を投下した！
……いや、なんとなく記憶にも残ってたから解ってたけど、一応驚いとかないと。

「ええっ！？」

「ええよ」

私が主演女優賞をもらえんばかりの演技をしたのに対して木乃香は最早神業と呼べる順応の早さでＯＫを出す。

……いや、私も住ませる気満々ではあるのだが、そこは少し悩んでほしいと思うのは贅沢なのだろうか？

「こ、木乃香……解りました。この子は私達の部屋に住ませます」

「すまないの。さて、もうすぐチャイムも鳴る事じゃしそろそろ教室へ向かいなさい」

学園長先生の言葉を受けて時計を見ると、なるほど確かに授業が始まってもおかしくない時間のようだった。

私達は学園長に別れの挨拶をして部屋を出たのだった。

・・・・・・・

部屋を出て教室へ向かっていると、ネギが私の横まで寄ってきた。

「あの、アスナさん」

「ん？　何？」

返事をしてネギの方を向くと、少し顔を俯かせている。

「すみません、何から何までお世話になりっぱなしで……」

「別にいいわよ、そんな気にしなくても。こっちに来たばかりで知らないかもしれないけど、この国には困った時はお互い様って言葉

があるのよ」

私がそう言うとネギは下げていた頭を上げて目をうるうるさせ始める。

「うう、日本人は優しいって聞いてたけど本当だったんだなぁ」

「ちょっ、泣き出さないでよ！　全く、大袈裟ねぇ」

そんなネギの反応に困惑しつつも愉しいと感じる私だった。

・・・・・・・

明日菜とネギの後ろをついてきていた木乃香は、横を歩くしずなに話しかけていた。

「やっぱり今日のアスナ、変な気するな～。先生は何か解ります？」

「さあ……私は彼女の事はあまり詳しくないから」

確かにこういう話はしずなよりも高畑に聞いた方が良いだろう。

そう判断した木乃香は一言しずなに謝り、誰にも聞こえない音量で呟く。

「子供嫌いなはずのアスナがあんなん優しいのも気にはなるんやけど……」

目の前を歩く二人はまるで久しぶり再会した姉弟のようだとも、木乃香は感じるのだった。

第2話　再会（改訂版）（後書き）

第二話改訂版でした。

今回はネギに会うまでが難産でした、色々設定増やしすぎたかもしれません。

次回は……レポートとテストがこれから待ち受けているので、また来月の今頃になると思います。

追記　６／２１

感想にて、木乃香の京都弁の違和感を指摘されました。

ですので、もしよろしければ具体的な修正箇所及び適切な表現を教えて戴ければと思います。

もしそれ以外の箇所にもおかしな所がありましたらお伝え戴ければと思います。

ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、どうかよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8187l/

今度は護ると決めたから

2011年7月29日20時01分発行